ろくおん通信

発行日：　１９９３年　３月１５日

No．５１号

発行者：　盲人情報文化ｾﾝﾀｰ録音製作

「音声訳」を考える　（第2回）

録音製作係　清水賢造

前回、音声訳とは、「墨字原本を音声に変換して、その内容を出来るかぎり正確に伝える作業」であると言いました。その為には、時には音声訳者が一部補足したり、削除したりする作業が必要だとし、その例の一つとして、数式を正しく音声訳するには、音声訳者が言葉を補う必要がある例を上げました。

今回は、記号類（例えば、カッコ、○○、・・・など）が使われている文章で、場合によっては言葉を補ったり、あるいは使われている記号の意味に変換して読む必要がある場合を取り上げてみます。

『レコーディングマニュアル』では、音声訳は、カッコ内の文章は音を下げて（ピッチを下げて）読む、カギカッコの文章は音を上げて（ピッチを上げて）読む、場合によっては「カッコ」などの記号を読み込むことで、墨字で書かれている通りの「状況」を「音の図書」として再現できるようにすることであるとされています。つまり墨字の表記、墨字の書かれている「状況」を視覚障害者に出来る限り忠実に伝えるようにすることを上げています。しかし、それだけではなく、これらの記号を音声に変換するには、晴眼者がその使われている記号の意味を判読しながら読み進めていくように、音声訳者がその意味を考えて音声に変換することが必要になります。

例えば、文章中に含まれている記号類には視覚的に用いられている場合が多くあり、使い方によっては同じ記号がいろいろな意味をもつことがあります。その為に、たとえ記号を正しく読んだとしても内容が伝わらないケースも出てきます。したがって音声訳は著者が表現している内容を音声になっても正しく伝わるように変換することを基本にしなければなりません。

ここで、誤解が生じないように、念のために強調しておきますが、「視覚障害者に正しく伝わるように音声変換をすること」＝「原文を変えて読んでも良いということ」ではありません。音声訳者が著者の文章の示す意味をよく考えて、出来る限り忠実に、且つ簡潔に音声

変換することが原則です（あくまでも出来る限りであり、完全に伝えることは媒介が違うので不可能）。墨字の表記に忠実に読むことで内容が伝わるものは問題はありません。そうでない場合に音声訳者のより適切な音声変換が求められるということです。この適切な音声変換の技術のことを、以下、「音声変換技術」と呼ぶことにします。

少し具体例で考えてみます。

例えば、「何々」という意味で使われている様々な記号、「・・・」「——」「○○」「 ― 」「○▽□」「□□」などを、「三点リーダー」とか、「ハイフン、ハイフン」などと読んだのでは、使われている記号の意味が伝わらないでしょう。しかし、「○○」の記号は「マルマル」と読んでも普通は通じます。それはこの記号が「何々」という意味として一般的に使われており耳慣れているからです。

ある蟹の話が出てくる文章で、「・・・ガニ、・・・ガニ、・・・ガニ、」というのを「(間) ガニ、(間) ガニ、(間) ガニ、」と読んだのでは何のことだかわかりません。また、「３点リーダーガニ、３点リーダーガニ、３点リーダーガニ」も「てんてんてんガニ、てんてんてんガニ、てんてんてんガニ」もやはり不自然です。私たちがこの文章を目で読む時は、「何々ガニ、何々ガニ、何々ガニ」とか、「何とかガニ、何とかガニ、何とかガニ」などと記号の意味を理解しながら読み進むでしょう。この場合、「——」を使おうが「○○」を使おうが意味的には同じで、記号がわかるということに意味はありません。

「・・・」の記号は、正式には「３点リーダー」「てんてんてん」とありますが、「無言」の意味だったり、「前略」「中略」「後略」だったり、「何々」だったりと使われ方は様々で、どれに変換するのが一番適切かを音訳者が判断することになります。先の例でも例えば『「○○ガニ」と表記するより、「・・・ガニ」と表記した方がイメージが・・・・・・』という文章であれば、「何々」と変換するのは当然間違いになります。

記号の正式な読み方をそのまま読んでも、使われている意味が伝わらなければ音声変換の仕事は不十分です。音声に変換した時に内容が伝わるように変換することが大切です。

つづく

正誤表から・・・その２６

語句	誤読	正しい読み	語句	誤読	正しい読み
暴戻	ボウルイ	ボウレイ	萬燈	マントウ	マンドウ
対蹠的	タイシャテキ	タイショテキ	千木	センボク	チギ
場末	バマツ	バスエ	塑像	ツイゾウ	ソゾウ
遊興費	ユウコウヒ	ユウキョウヒ	樋	トヨ	トイ

二通りの読み方があって各々意味が異なるもの・・・その13

水上	ｽｲｼﾞｮｳ	水の上、水面、水のほとり	貿易	ﾓｳﾔｸ	官物ｦｽﾘｶｴﾙｺﾄ
	ﾐﾅｶﾐ	水の流れてく上の方、上流		ﾎﾞｳｴｷ	交易
実物	ｼﾞｯﾌﾞﾂ	実際のもの、又は人	目明	ﾒｱｹ	目先、鑑定
	ﾐﾓﾉ	園芸ﾅﾄﾞﾃﾞｵﾓﾆ果実を観賞ｽﾙﾓﾉ様		ﾒｱｷ	目ﾉ見ｴﾙ人、文字ﾉ読ﾒﾙ人
				ﾒｱｶｼ	鑑定ｽﾙｺﾄ、ｵｶｯﾋﾟｷ、ﾃｻｷ
目下	ﾒｼﾀ	自分ﾖﾘﾓ下ﾉ人(地位、身分、)	木瓜	ﾓｯｶ	ﾎﾞｹﾉ別称、ﾎﾞｹとも読む
	ﾓｯｶ	眼の前、ただ今		ﾓｯｺｳ	(植) ﾊﾞｲｶｱﾏｼｬﾉ別称、紋所ﾉ名

～～～～～　Ｑ＆Ａ　～～～～～

Ｑ：　新しいカセットコピー機の購入を考えていますがよい機種があれば紹介してください。

Ａ：　カセットのコピー機はＳＯＮＹやＴＥＡＣなどから出ていますが、価格などの点で言えばＳＯＮＹが最近出した「ＣＣＰ－１３１０Ｆ」がお勧めできます。
価格は、344,000円で、１台で３巻までコピーできます。１６倍速の高速（従来の２倍のスピード）でコピーでき、専用子機は１台で４巻コピーできます。子機の価格は344,000円で、最大１０台まで接続が可能です。従来のＳＯＮＹのコピー機（１対３）のおよそ半額になっています。

Ｑ：　前回、ＳＯＮＹのＴＣ－ＲＸ７９が製造中止になると聞きましたが、これに代わる新しい機種は録音図書製作に向いているのでしょうか。

Ａ：　「ＲＸ－７９」に代わる機種として、「ＴＣ－ＲＸ７１１」が出ています。機能的には「ＲＸ－７９」とほとんど変わらないということです。カセットを入れるところが中央になり、操作ボタンがこれまでよりやや小さくなった為、操作が少しやりにくくなったようです。しかし、リモコンは同じでなのでリモコン操作の方には関係ないようです。定価は３９，８００円で同じ価格に据え置かれています。

1993年度 盲人情報文化センター

「音訳講習会」実施要項

【実施期間】　１９９３年６月８日（火）～１９９４年６月末
<毎火曜日　５０回程度>
第１期　期間：１９９３年６月～１９９４年３月（午前10時半～12時半）
内容：音訳に必要な音声表現技術（40回程度）
講師：新井洋子氏
第２期　期間：１９９４年４月～６月末（午前10時～12時）
内容：録音技術・音声変換技術・録音の順序（10回程度）
講師：職員

【定　　員】　１０名程度

【申込方法】　所定の申込用紙に記入のうえ、郵送（または持参）する。
申込用紙は希望者に盲人情報文化センターから郵送します。
電話　06-441-0015（担当　清水）

【申込〆切】　１９９３年４月３０日（金）までに必着

【試 験 日】　１９９２年５月１８日（火）盲人情報文化センター（９階）
午前１０時までに来て下さい。（約２時間程度かかります。）

【試験内容】　１．漢字の読み　　２．アナウンステスト
３．簡単な図表の説明（作文）　　４．面接
＊注意！　筆記用具持参のこと。

【発　　表】　５月２９日（土）までに本人宛にご連絡いたします。

【講習開始】　１９９３年６月８日（火）　１０時３０分～１２時３０分

グループリーダー連絡会

日時：　１９９３年３月２６日（金）　場所：　盲人情報文化センター６階
１３：３０～１５：３０
内容：　１．グループリーダーを中心に処理の研修。
（第２回、（ ）の処理の研究）
２．グループ交流